

ナ
イト
メア

DQナイトメア
フルカラー同人誌版



CRIMSON COMICS

戦いの後始末には
また時間がかかるはずだし
みんなが戻ってくるまでに
もう一同イカせてやろうかな？

DQ ナイトメア

ゼシカ編



チャゴス王子はゼシカを卑劣な隕にはめた。

しびれ薬で身体の自由を奪い、馬車のなかで陵辱の限りを尽くす。
しかも馬車の外では仲間がモンスターと戦っている最中.....
負けん気の強いゼシカはチャゴス王子の
いやらしい責めに一人でなんとか耐えぬいた。

(性慾りもなく私を呼び出すなんて！)
衛兵が持つてきた手紙は間違いなく王子の直筆のもの。
内密の話があるため城まで出頭せよと書いてあつた。
(今度こそヤフンと言わせてやるわ)

城の奥にある応接間に通されて数分。
すでにゼシカは焦れっていて、イライラを周囲にまき散らしている。
「遅いわね.....」
いつたいどんな手を使ってこらしめてやろうか。
あれこれと考えながら待つゼシカだつたが.....
(あれ.....だめ、なんか眠い.....?)
ふいに強い眠気に襲われる。
(まさかこんなタイミングで眠いだなんて.....そんなわけ.....)
頭はどんどん動かなくなり、
意識が白いもやで覆っていく.....



久しぶりに
お前のカラダで
遊びたくなつてね

ちょっと
ボクの遊びに
つきあつてもらうよ

この前の
馬車の中
みたいにね

今日はとことん
楽しもうじや
ないか

な…何よ
これ！？

上からゼシカを見下ろす。
気丈に睨み返すゼシカだったが、
その瞳の奥にわずかに動揺と焦りが見てとれる。
『今日はとことん楽しもうじやないか。
この前の馬車のなかみたいにね』
「ふざけないで！」
強くまっすぐな口調。
けれど自分の優位を確信している王子は
余裕たっぷりにいやらしい笑みを浮かべる。

「う……あ……？」
うすぼんやりとしたゼシカの視界に
小太りの人物の輪郭が映る。
「く……」
徐々に意識がはつきりしてくると——
チャゴス王子の得意げで自信たっぷりの表情が見えた。
「あ、あんた……！」
『よく来たね』
やや興奮の色が入り交じった笑顔で
ゼシカの全身に怖気が走った。
半ば本能的に身をよじろうとするが——
しっかりと縛り付けられた四肢はびくともしない。
「何よこれ！？」は、離しなさいよ！
『久しぶりにお前のカラダで遊びたくなつてね
ちょっとボクの遊びにつきあつてもらうよ』
王子は勝手なことを言いながら、
ゼシカのおとがいを持ち上げた。
「うう……」
『ふふふ』



王子が最初に手を伸ばしたのは胸だった。

「く……ううつ！」

ゼシカの豊満なそれを両手を使ってみしだく。

『やつぱりすごいなお前のオッパイは』

王子は自分の玩具を好きに扱うように、乱暴にゼシカの胸を弄ぶ。

『い、痛つ……く、ああ！』

『それくらいがいいんだろう？』

「はあ！？ そんなわけ、ん、はあ、ないでしょっ！？」

『フフン。早くホントのこと言いなよ』

悦に入つて強引な愛撫を続ける王子だが、

事実ゼシカは感じてはいなかつた。

王子の下手な愛撫は性的な興奮とは無縁だ。

けれど——身体が震えてしまふほど屈辱的なのは事実だつた。

(こんなやつに……っ！)

卑劣な相手への歯噛みするほどの怒りと、

あつさりと戻にはまつてしまつた自らの情けなさを同時に感じる。

『どうした？ もう感じてきたのかつ？』

そんな赤い顔をして……

よつほどボクのテクニックがいいんだな！？

興奮して言う王子とは正反対にゼシカの心は冷めていく。

『勘違いもほどほどにしなさいよ！ 誰があんたなんかに……！ このヘタクソつ！』

『う……そ、そんなことを言つていいのかな？』

ゼシカの剣幕に若干たじろいだ王子だが、すぐに気を取り直す。

何しろ相手は動けないのだから。いくらでもやりようはある——。

言つただろ?
痛みはないって

針治療用の
極細針だからね

これで
お前のカラダを
エロエロに改造
してやるぞ

くうつ!

はあつ!

王子は棚から細い針を取り出し、ゼンカの眼前につきつけた。

「これが何かわかるかな?」

「きやつ!? そ、そんな危ないものこつちに向けないでよ!」

極細の針が光を反射してきらきらと光る。

いや、光っているのは針だけではない。針の表面についた、
少し粘性の液体が独特的の輝きを発している。

『痛みはほとんどないはずだよ。ヒヒッ』

『ま、まさかそれを私に……!』

『そのまさかさ!』

またしても悦に入りながら、王子は針をゼンカの胸にゆっくりと刺す。

(ひつ!? い、痛……? え……? あれ、痛くない……?)

『フフ。これには王家秘伝のクスリが塗つてあるからね』

意味ありげに王子は笑い、次の針をあろうことかゼンカの胸の先端に刺す。

『ひあ……!? あ、れ……』

けれどやはり痛みはない。針の太さ自体が極細のため
痛覚にあたらなければ痛みが発生することはない。

それどころか、針の先端がある場所から感じる若干の痒みが
かえつて心地いいくらいだった。



ビアンカ編

知人の紹介で初めて訪れたその店は、ハーブや香料のさわやかな匂いでいっぱいだった。
（訪れた人を美しくする術を施す、つていうからどんな店かと思つたけれど……）
ビアンカ王妃は幾分リラックスしながら店内の清潔なベッドに横たわる。
（何のことない、ハーブオイルでマッサージしてくれるつていうわけね）

店員も女性ばかりなので安心感がある。

「失礼しまーす」

『あ、よろしくお願ひします』
二人の女がタオルとハーブオイルの瓶を持って入ってきた。

『さっそく始めますね』

慣れた手つきで良い香りのするオイルをビアンカの肌に塗り、軽くマッサージしだす。

（あ……きもちいいかも）

ハッカのようなすっと鼻に通る香りがして、皮膚の表面がじわりと熱をもつ。

（美しくするつていうのは眉唾どとしても疲れをほぐすことはできそうだわ）

女マッサージ師の腕が良いのもあって、自然にビアンカの身体から力が抜けていく。

全身にくまなくハーブオイルをもみこんだ後に、

首筋から徐々に下つていく形で本格的なマッサージが始まる。

「ん……」
鎖骨から胸に続くラインを指が這う。

あくまで柔らかいタッチだが、

ツボになる場所を刺激するせいか時折ぐつと力がこめられる。

「はあ……」

ソフトタッチのくすぐつたさと力がこめられたときの心地よさとのギャップで

身体が浮き上がるかのようだった。

『胸のあたり少し凝つてますね』

「あ……そうですか？」

『ええ。大きめだけど形は良いし……』

普段から下着でしつかり支えてるからだと思いますけど、そのぶん凝つてますよ』

店員の声は涼やかで耳も心地いい。

よくわからないが、こういう店の人が言うのならそうなのだろうかという気持ちになる。

『胸のあたりの力を抜いてリラックスしてくださいね』

『はい』

言われた通りに脱力すると、

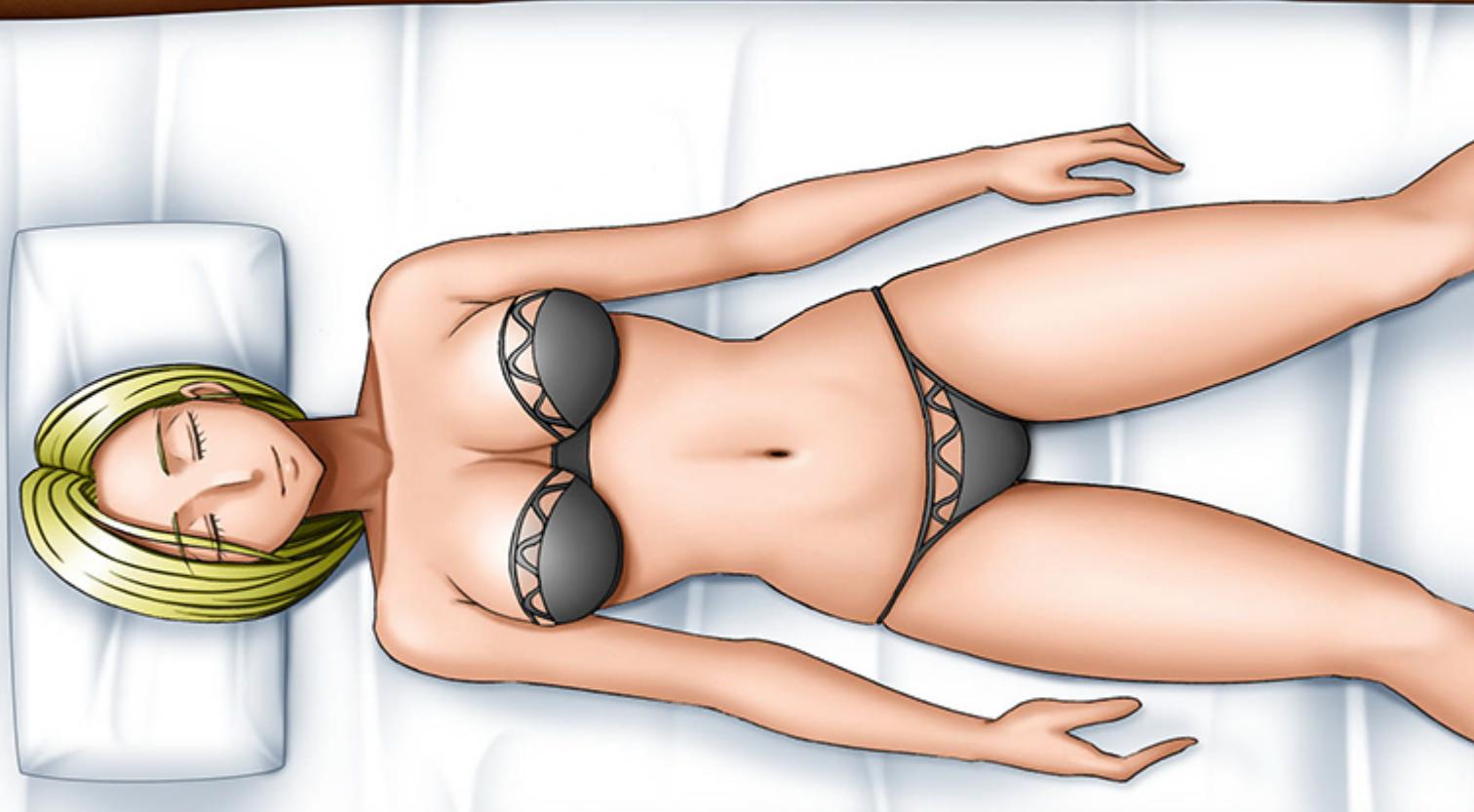
女の指がよりしつかりとツボに食い込んでくるような気がした。

「ん……あ……」

言された通りに脱力すると、
女の指がよりしつかりとツボに食い込んでくるような気がした。

「ん……あ……」

痛気持ちいい感覚で少し声が漏れてしまう。



どうしましたか
ビアンカ様？

んつ！

い…いえ…
何でも…

ヌル
ヌル

あれ……

女の手の動きが段々とエスカレートしているように感じる。
胸ばかりを重点的にマッサージしてくるのだ。

(それくらい凝つてるつてことなのかもしれないけど……でも……)
女の細く長い指がビアンカの豊満な膨らみにしつとりと食い込み、
優しくあとを残す。

「ふあ……あう……」

リラックスできる心地よさから、
性的な緊張感の心地よさに徐々に変化してきている気がした。

「あ……は……、う……」

期せずして声が漏れてしまい、気恥ずかしさが募る。
(これってマッサージ……よね……?)

『どうしましたかビアンカ様？』

「い…いえ、何でも…んつ！」

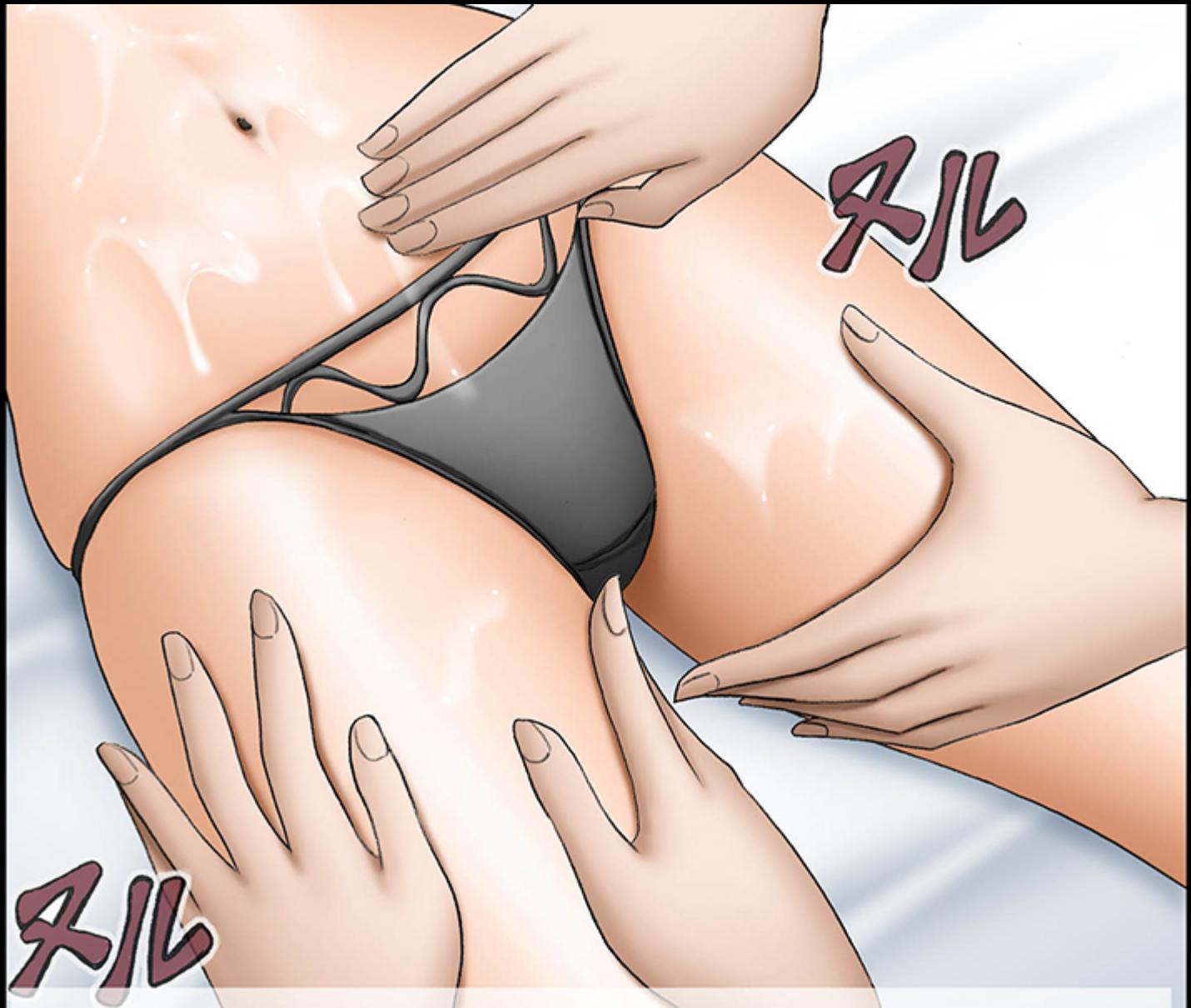
気を散らそうとしても変に意識してしまい、

だんだん自分ではコントロールできなくなつてくる。

(おかしなことは考えないよう、他のことでも考えないと……)

不安と不審感のなかで懸命に我慢を続けるビアンカ。

そんなビアンカを見て、女たちはひそかに笑い目配せを交し合う。



やっと女たちの手が胸から離れた。

(……解放された……)

「ふあ……！」

安心しかけたところの不意打ちに思わず大きな声が漏れる。

『ふふふ……。良いんですよ。私たちが施術してると、

皆さん自然と声が出てしまうみたいですからね』

「ん……は、あう……」

そう言われても、今のビアンカの胸中には

じつとりと湿った罪悪感があった。

純粹にマッサージの心地よさで声が出来てしまうのならともかく、

今自分は性的な興奮を覚えているからだった。

「ふ……は、うう……」

太股をさすっている手が徐々に脚のつけねへと移動していく。

(それ以上は……！)

拒むビアンカの想いが通じたのか、

手はまた太股の中ほどへと這つていった。

「あ……はあ……」

しかしまた徐々に脚のつけね——股間の近くまで這つてくる。

太股を単純に往復しているだけの動きなのに、

ビアンカの胸の中は緊張で張り裂けそうだった。

「う……ふあ、ああっ！」

とん、と。

指が股間にほんの一瞬だけ当たり、大きな声が漏れてしまう。

「はふ……うう……」

(どうしよう……私、思った以上に……！)

少し触れられただけで下腹の奥が急速に熱をもつたのがわかる。

『すこしまあしいですか？アイマスクをさせていただきますね？』

「え——」

全く予想していなかつた言葉が耳に入り、
ビアンカの視界はすぐに闇に包まれた。



(こ、こんな、目隠しをするみたいに……)

これもりラックスするためなのだろうか。

女たちがアイマスクをかける手つきはとても手馴れたもので、抗議の言葉を差し挟む隙すらなかつた。

『はい、うつぶせになつてくださいね』

「え、あ——」

視界を失つたことで完全に主導権をとられてしまう。

女たちはビアンカの“不安”と“疑念”を

巧みに嗅ぎとつてあえて的を外す。

「あふ……うう、ひ……！」

身体全体が火照ったように感じるのはハーブオイルのせいなのか、

それとも自分の身体が高ぶつているからなのか。

目隠しをされたことで肌感覚が余計に敏感になり、

女の手に良いように翻弄される。

「はぐ……ん、くう……！」

だが、うつぶせになつたことである程度の余裕も生まれていた。

何しろこの体勢なら——どんな表情をしても見られずに済む。

(こ、声だけ我慢してれば……声さえださなければ大丈夫……っ)

ハーブオイルでぬるぬるになつた背中や尻を女の手が這い回る。

時折股間にまで指での刺激は及び、わずかではあるが股間の媚肉を弄んだ。

「うく……はつ、ん……うう……！」

二人の女はゆつたりとしたグラデーションをかけて

じっくりとビアンカの身体を高ぶらせてきた。

「あは……！　ん、あ、あ……う……ツ」

気づかぬいうちにビアンカの下腹の奥底には性感の火が灯る。

「くふ……は、んん……っ」

声を我慢するのに必死で、

自分がいる状況の異常さに気づけなくつつあつた。

声さえ
ださなければ
大丈夫……っ！

こ……声だけ
我慢してれば……！

力加減は
いかがですか
ビアンカ様



「はあ……ん、はあ、はあ……っ」
女たちはまたビアンカを仰向けにさせる。

身体全体にも汗をかいてオイルと混ざり合っている。
「う……あ、はあ、んう！」

その頬は上気して赤く染まり、
十分に目でビアンカの痴態を楽しんだ後に

また女たちのマッサージ……いや、責めが始まつた。

『下着はとつてしまひますね』
『え……！？』

鈴を転がすような声でさも当然のようにビアンカの胸をはだけさせる。
『仰向けになつてもこれだけ形が崩れないなんて、素晴らしいですよ』

『はう……ん、ああっ！』

いくら褒められても今のビアンカは喜ぶどころではない。
キュッと引き締まつた筋肉とそれとは対照的な柔らかく豊かな乳房。
美しい肉体を自分のもののように操り弄ぶときの
ぞくぞくとした興奮を女も感じている。

『ほんとに綺麗……』

女は半ばいたずら心もあつてビアンカの乳首をくりくりと指先で揉いた。

チャモロ！

あ：あなた
正気なの？！

ああ……
ずっと触つて
みたかつたんだ

ミレーユさんの
このおっぱいを

ミレーユ編

魔王ムドーと対峙した レック ミレーユ ハッサン チャモロ。

『お前たちのよくな虫けらが何度も来ようとも
この私をたおすことなどできぬ！』

ムドーが咲笑し、その指先が閃いた。

光が部屋のなかを満たし、皆そのなかに飲み込まれていく――。

「う……」

目覚めたミレーユの視界にまず入ったのはチャモロの顔だった。

「無事だったのね！」

安堵して言うが、チャモロは何も応えない。

「？ 痛つ……？」

疑問を感じると同時に、自分の身体が誰かにがっしりと掴まれ、支えられていることに気づいた。

「ハッサン……？」

ミレーユが振り返り、見上げて言うとハッサンは笑った。

だが、その笑いは快活なものではなく、どこか陰湿な雰囲気が笑う。

「二人とも、無事でよか……つ！」

ミレーユが言い終わる前にチャモロが手を伸ばし、二つの柔らかな膨らみに触れた。

「あつ……な なにを！」

ミレーユが驚いて声をあげても、ニヤニヤと笑いながら胸を触り続ける。

「チャモロ！ あ……あなたの正気なの？！」

「ああ……ずっと触つてみたかつたんだ。ミレーユさんのこのおっぱいを』

「く……何言つて――」

構わず胸を揉み続けるチャモロから逃れようと身をよじる。

だが――ハッサンがしつかりと身体を拘束してそうさせない。

「ハッサンまで！ どうしてことなんことを――
焦るミレーユの脳裏に、ムドーが発した強烈な光がよぎった。
(まさか……また夢の世界に?)

これが現実の
わけがないわ！
仲間を信じないと！

「柔らかい……最高ですよ」

「く……あう……ツ」

夢の世界だろうと何だろうと、今実際にこうしていいように胸を弄ばれている不快感は変わらない。

「やつ！離してっ！」

言つて暴れてみるが、ハッサンはミレーユの細腕の抵抗など全くものともせずに押さえ込む。

「うあ……！」

ますますがつちりと拘束されたところで、

チャモロが再び手を伸ばす——。

「あ、や……んう！」

普段の品行方正な彼からは想像できない態度だ。

（これは……やつぱり、夢の世界……？）

だが、今まで経験した夢の世界とは少し雰囲気が違う気もする。

（ダメ、わからないわ……）

それがムドーの魔力によるものなのか、

それとも——あるいはこれは夢の世界ではないのか。

そのそつとするような想像にミレーユの皮膚があわだつ。

（これが現実のわけがないわ！仲間を信じないと！）

だが——ミレーユの脳裏には、

旅のなかで時折感じたチャモロやハッサンの

柔らかい……
最高ですよ

おや?
ミレーユさんとのこ
少し固く
なってますよ?

“男の目線”が浮かぶ。
（はあ、あう……あう、ううん……！）
そんなミレーユの逡巡を見透かしているのか。
チャモロもハッサンも薄く笑う。

俺たちは旅の間中
ずっとこうする
チャンスを
うかがつてんだぜ

そんな……！？

はあララ
ララララララ!!

「そうですよ
ミレーユさん
ボクたちが
どれだけあなたの身体を
欲していたのか
わかりますか」

「あなたみたいな美人…
ボクの村には
いませんからね」

「一緒に旅してたん
ですよ」と興奮してたん
です。

「く、ふあ、ああ……いや、そんな、吸つたら……あ、はああ！」
ミレーユの四肢が震え、一瞬力が入つて固まつた。
だが——そこでチャモロは口を離す。
「あ——はあ、あう……はあ、はあ……」

達しかけたところで中途半端なままやめる、絶妙なタイミングだった。

戸惑うミレーユに男たちはさらにつけこむ。

「きや！？」

ミレーユを横に寝かし、チャモロがズボンをびりびりにやぶいた。

「いや！ やめてっ！」

足をばたつかせて抵抗するミレーユに全く頓着せず、

チャモロが股間に口をつける。

「ひ！？ ふあ、ああ……！」

なまあたたかくぬめった感触が股間にあらわれた。

「いや、やあ……こ、こんな……ああ、信じられな……」

「はあ、ああ！ どうして……う、んんう！」

「それはな、ミレーユ。お前があまりにも美人だからだ。

俺たちは旅の間中、ずっとこうするチャンスをうかがつてんだぜ」

「そんな……！？ はあ、ああうううん！」

「そうですよ、ミレーユさん。

私たちがどれだけあなたの身体を欲していたのかわかりますか』

「ん、はあ……あはあ、はあううん！ くう、ん、あ、やあ……！」

チャモロはますます激しく秘所を愛撫する。

『あなたみたいな美人…ボクの村にはいませんからね。

『一緒に旅してたん
ですよ』

舌で膣口を何度も何度もなめあげ、あふれてた愛液をすくいとる。

『ずす、すそつ……、ふう、ミレーユさんの、いくらでも溢れますよ』

『ひあ！？ いや、そんな……飲まない、で……うあ、はあ、ああ……！』

口の周りを濡らして笑うチャモロ。その表情は醜悪で、

かつ女を追いかける陰に満ちている。

『すそ、じゆるる――！』

達しかけたところで中途半端なままやめる、絶妙なタイミングだった。

お前を
一目見たときから
いつかこうして
やりたかったんだ

わくわく

最高だなこの感触
滅多に味わえる
もんじやないぞ

いけない……
頭のなか
ぼうつとして……

『次は俺の番だな』

「いや、やめて……！」

ハツサンは拘束するのをやめ、自らミレーユの胸を驚掴みにした。

「あ、やあ、うう……！」

(逃げなきや……い、今なら……！)

ハツサンは自らの欲望のまま

ミレーユの胸の感触を楽しんでいるだけで、

強く拘束はしていない。

だが、四肢は思うように動いてはくれなかつた。

さつきチャモロに与えられた快感のせいで、

全身から力が抜けてしまつていて。

「やあ、いや……ん、はあ、はう……く、んああつ！」

『お前を一目見たときから、いつかこうしてやりたかったんだ』

悦に入つてハツサンは言い、

抱きもせずに丹念にミレーユの胸を揉む。

下から持ち上げて重量感を楽しんだかと思うと、

胸全体を手で覆つてその美しい形と弾力を味わう。

『最高だな、この感触。滅多に味わえるもんじやないぞ』

興奮が滲む声がミレーユの耳朶を打つ。

ハツサンの発するオスの臭氣がミレーユを襲い、

胸の中心に熱を送り込む。

(いけない……頭のなか、ぼうつとして……)

「はあ、あう……く、ふうん、あう……！」

ミレーユの反応が徐々に大人しいものになつてゐるのを見て、

ハツサンは目を細める。

『胸でこんなにも感じるやつがいるとはな』

「ち、ちが……あう、うう、はああ！」

ハツサンやチャモロの言葉がミレーユには未だに信じられない。

こんなことを言うはずがない……そんな想いがあるが、

同時に身体を弄ばれる生々しい現実感に戸惑う。

